

阿部安成 著

『島で

—ハンセン病療養所の百年』

サンライズ出版

2015年、191pp.

菊地利奈

Rina Kikuchi

滋賀大学 経済学部 / 准教授

本書『島で—ハンセン病療養所の百年』は、瀬戸内海に浮かぶ大島(香川県)につくられた国立のハンセン病療養所「大島青松園」(1909年に第四区療養所として創設)で生きた4名の療養者の生を通して、ハンセン病療養所の100年を明らかにしようとする、本学部教授の歴史学研究者阿部安成による10年にわたる大島青松園におけるフィールドワークの集大成だ。本書は「I 大島を訪う」「II 療養所の本棚—霊交会蔵書のあれこれ」「III 導きのひと—三宅官之治」「IV 療養者を探索する—長田穂波」「V 著書を精査する—青木恵哉」「VI 几帳面なひと—石本俊市」「VII 大島を歩く」の全7章から成り、これに「まえがきにかえて」と「あとがきにかえて」がついている。本書の約70%にあたる133頁が、三宅官之治、長田穂波、青木恵哉、石本俊市という4人の人物に割かれているところにその特徴がある。4人の共通点は、「ハンセン病に罹り青松園で生きた療養者」であったこと、「男性」で「キリスト教徒」であることだ。本書の歴史学的価値については歴史研究者にゆだねるとして、ここでは、文学研究者の視点から、本書を読み解いてみたい。

「ハンセン病文学」というカテゴリーがある。ハンセン病に罹った人々が書いた文学なのか、ハンセン病について書かれた文学なのか、それともその両方なのかの議論はさておき、一般には、「女性詩=女性が書いた詩」「日本文学=日本の(人々が

書いた)文学」同様、「ハンセン病の人々が書いた文学作品」という風にとらえられているのではないだろうか。研究の便宜上必要なこのようなカテゴリーにおいては、その前提になるべく明確な定義がなく、イメージだけが先行していることがある。たとえば「日本文学」の「日本の人々(いわゆる「日本人」)」とは誰か、という明確な定義はあるのか。「日本文学」の代わりに「日本語文学=日本語で書かれた文学」という呼称が使われるようになりその意味するところがより明らかになったことは喜ばしいが、この呼称は残念ながらまだ一般に浸透しているとはいえない。

「ハンセン病文学」についても「イメージ先行」になっていないだろうか。私は本書を読み内省の機会を与えられた。「ハンセン病文学」といえば、北條民雄、明石海人、そして、塔和子の名を思い浮かべる人が多いだろう。このうち、北條については、詩人長田穂波との共通点が本書で指摘されている(105-106頁、以下ページ番号はすべて本書)。しかし、長田同様詩人で青松園の療養者でもあった塔和子については、著者はその名を挙げることをしない。明確な意図をもってその名を避ける。なぜか。「大島青松園というところまでしばしば、ひとりの著名な女性がとりあげられ」てきた、その女性こそが塔和子であり、「それをもって療養所を考えることを済ませてきたところがあった」と問題視する、その姿勢からこの書が生まれたからであろう。

「ハンセン病文学」と人が言うとき、なにが期待されているのだろう。ハンセン病に罹ったがゆえに、「ハンセン病療養所」という「劣悪な」環境に「隔離収容」された人々が、その「過酷な環境」においても「生き抜き」「たたかうようす」を、その作品に見出すことを無意識に期待していないだろうか（3頁）。そして、その劣悪な環境に強制的に押し込まれた不治の病に罹った人々が、そのような不条理とたたかいながら懸命に生きる様子を「驚きをもって見つめ」（同）、その様子に感動し、ときには涙を流し、「顕彰し賞賛」（4頁）してはいないか。だからこそ、長田穂波の第一詩集『詩集 靈魂は羽ばたく』（1928年）の冒頭には、与謝野晶子による「作者長田穂波君は、ペンを右手に紐で括り付けて、この詩篇を書いた」と思えば、旧約聖書でありとあらゆる病にかかり試練を課される信仰厚き人物ヨブについて書かれた「ヨブ記以上に、意味深いものである」との序が掲げられるのではないか（76-77頁）。阿部が問題視する、ハンセン病をめぐる歴史研究と歴史記述の「ひとつの型」への批判は、ハンセン病をめぐる文学研究にもあてはまる。この問題は無意識におこなわれるがために、私たちが認識しているよりもずっと根が深い。本書は、ハンセン病をめぐる歴史研究・歴史記述の「定型」への挑戦でもあり、読者ひとりひとりが持つ「ハンセン病の型（イメージ）」への挑戦なのだ。

このような無意識のうちに埋め込まれた先入観（イメージ）を打ち破るため、著者は、大島青松園で生きた療養者の人々の生を、療養所に残る記録ひとつひとつを丁寧な紐解くことで明らかにしてゆく。すると、なんの根拠もない勝手な先入観で「ハンセン病療養所で暮らす療養者の人々の人生に対するイメージ」を膨らましていた私のような読者の目の前に、次から次へと＜意外な事実＞があらわれる。たとえば、ハンセン病療養者が物理的に

移動していた、ということについて驚きを感じるのは私だけだろうか。ハンセン病を発病した人々は、ひとつの療養所に閉じ込められ、二度と再びその療養所を離れられないような印象を持っていた。そういう人々もいたのかもしれないが、「ハンセン病者は全員がそう」だとの思い込みは、ハンセン病という病に罹った人々に対して自分が勝手に作り上げたイメージであったことに気づかされた。第3章で扱われる三宅官之治は、岡山出身。熊本の療養所へ入るが、「母親の在す郷里に近き所に住まんことを望み」、大島青松園に移動している（47頁）。岡山から熊本そして大島への移動距離も、母親の住むところに近い場所にある療養所に移動したいという希望がかなうことも、そもそも療養所に連れ去られた、あるいは強制的に隔離されたという強制性が感じられないことも、私の持っていた先入観を打ち壊した。

第5章で扱われる青木恵哉にいたっては、その移動距離も特別に長く、大島から四国、熊本、沖縄と「移動する療養者」であったという（112頁）。そうかと思えば、第6章で扱われる石本俊市のように、「76年あまりの生涯のうち、60年3か月を大島に生きた」人物もいる（155頁）。療養者の移動ひとつを例にとっても、さまざまな人がいてさまざまな例があるというごく当然のことに、なぜ私は思いが寄らなかったのであろう。

療養所における「外」との交流も、思った以上に盛んである。毎日曜日には島外から牧師がやってくる（31頁）。療養者が発行する文芸誌は、島外へ発送される。島外からの書籍や書簡が、療養者個人宛に届く（33頁他）。アメリカからの宣教師エリクソン夫妻が島に足を運び、婦米した夫人とはエアメールで交流が続く（59-60頁）。三宅官之治の死に際しては、「元東京帝国大学教授」や「元岡山医科大学長」らから心のこもった追悼文が島外か

ら寄せられる(46頁)。牧師と療養者の間に真の友情が芽生えもする(56-59頁)。長田穂波の第二詩集『みそらの花』や青木恵哉の著作『選ばれた島』は英訳もされた(77-79頁、119頁)。三宅官之治が亡くなった後には、大島青松園で「園内の信頼を一手に受け」と名誉を讃える記念碑が、故郷に建てられた(51-52頁)。

故郷という療養所の「外」の社会に、療養者の記念碑が建てられるとはどういうことなのか。ハンセン病に罹った<気の毒な人々>は生前はもとより、ハンセン病だと知られれば故郷に迷惑がかかると死んでも故郷に帰れず、その生きた痕跡は闇に葬られるのではなかったのか。大島青松園の場合、三宅のように「外」に記念碑が建てられたケースは、(療養者ではない医師なども含み)「おそらく3件」(50頁)だというので、三宅のケースは例外には違いないが、このような事実があると知ることは貴重である。長田穂波が大島に来てから「すでに、700名近いものが死亡し」との記録があり、これらの人々は「死者の臨床実験」に利用され(100頁)、使われた医療廃棄物として「記録から抹消」された解剖台が2010年に海中から引き揚げられたこともあるというストーリーから想像できるように(183-184頁)、療養所で生きた多くの人々の生は記録から抹消されてしまったのかもしれないが、記念碑まで建てられ、記録が残る生も存在したのだ。

戦中には、療養所の「外の社会」同様の変化が療養所内にも起きている(114-117頁)。めざせ大東亜共栄圏、日の丸万歳の思想が、療養所内にも押し寄せる。第5章で扱われている青木恵哉は小説のモデルとなり「無頼東洋」を唱える人物として登場したという。これらの戦中の出来事が、戦後「いっさいとりあげられることがないもの(117頁)、「外」の社会と同じである。療養所の内と外には、

明らかに連動がある。両者は完全に遮断されたものではありえず、両者にはつながりと交流がある。これも、読後にはごく当然のことだと感じられるが、本書を読む前に考えついたかどうか。

「ハンセン病文学」を考えると、私たちは「ハンセン病患者でありながら」すばらしい作品を残したと、無意識に考えているのではないか。このような「善意による賞賛」について、著者は「相手を劣位におく無自覚の貶位におく無自覚の貶視が潜んでいる。盲目であるにもかかわらず交響曲を創りあげた、ハンセン病であるにもかかわらず数多くの詩をうたった、とくりかえされる賛辞を贈るものたちは、その当人には本来であれば詩を創ったり伝道したりする能力がないとあらかじめ評定をしていることに気づいていない。善意が掘った落とし穴は深い」と手厳しい(122頁)。私たちは日常生活のなかで、あるいは研究の上で、このような落とし穴に、自らが自覚している以上に頻繁に、そして深く、落ちてしまっていないだろうか。

阿部の日本語は精密であろうとしているがゆえに、日本語という言語そのものをデコンストラクト(デコンストラクション・脱構築)しているところがある。阿部は「ハンセン病に罹った人々」を「ハンセン病患者」や「患者」と呼ばない。彼らはあくまで「ハンセン病という病原菌に罹った人々」なのだ。ひとつひとつの語が持つ、不用意なイメージを拭払うためにおこる現象だろう。このデコンストラクション現象があまりにもすすむと、最も偉大な20世紀の作家ともいわれるジェームズ・ジョイスの後期の文章のように、言語そのものが崩壊して、作者の意図が読者に伝わらなくなる可能性があるのではないか。ひとこと「長年その存在が確認できなかった資料を私は戸棚の奥から発見したのだ」とでも言えば、阿部の10年にわたる地道な島での調査の功績の偉大さも簡単に伝わると思うのだが、

阿部は「思いもかけない過去の造物」を次々とみつけながら、これらの造物(資料)は「しばらくのあいだゆくえ知れずとなっていただけ」であり、「発見した」などと雀躍するべきでないと戒める(150頁)。その結果、今まで知られていなかった穂波の日記を「発見」したことも、「一冊だけみつけた」のひとことですませてしまう。

ハンセン病をめぐる研究を、先入観なしで語ることがいかに困難か、私は本書を読み痛感した。この場合の「先入観」とは「差別意識」に根付くもので拭払しにくい。療養所内でさえも、ハンセン病に罹っていない職員たちは「無毒」とされ、療養所で生きるハンセン病に罹った「有毒」な人間から明白に「区切られ」ていた(40頁)という大島青松園。そこで生きた「有害」だとされた人々の生を、ハンセン病に罹っていない、キリスト教信者でもない、完全なる「部外者」の一歴史学者が、情熱と執念を持って島で丹念におこなった10年におよぶ調査。この事実そのものに、ハンセン病をめぐる「内」と「外」との「つながり」を、私は実感する。

阿部とその共同研究者・共著書らによるリプリント版で多くの資料が読めることになり、それが本書のような研究書につながり、私のように大島に足を運んだこともない人間でも、療養所内で生きた人々の生を知ることができるようになったことの意義は大きい。今後、住人が少なくなりつつある療養所で資料をどのように保存できるのか等課題は多いと思う。しかし、これらの資料が「まるごと保存」され(41頁)、活用され、これからも、歴史学者らのたゆまぬ努力により、ハンセン病療養所に生きた人々の生の痕跡が記録から掘り起こされ、私たちに知られるようになることを願う。